

令和2年度 総合的な学習の時間 学習指導研究委員会のまとめ

一 研究テーマ

- A：(新型コロナ対応に伴い) 地域に学ぶ総合的な学習の時間がとれなかった場合の、その代替となった活動の様子
- B：地域のよさを実感し、自ら関わろうとする総合的な学習の時間のあり方

二 研究テーマによせて

本年度はコロナ禍で、多くの学校が2ヶ月遅れでのスタートとなり、総合的な学習の時間の計画も大幅に修正せざるを得ない状況となった。特に地域に学ぶ総合的な学習の時間は、地域講師・生徒(児童)双方の健康面を考慮し、例年どおり実施できなかった学校が多かったと思われる。また、例年どおり進まなかったのは、準備に時間を要する行事も同じ。そういった状況下での各校の工夫した実践の様子や、学校が通常の状態に戻ってもそのまま生かせるような活動などを中心にお伝えしたい。



ところで、地域に学ぶ総合的な学習の時間のよさはいくつかあるが、そのよさについてあらためて二点述べたい。一点目は「生徒の自尊感情が醸成される」ことである。地域の方に褒めていただいたり、共感していただいたりすることは、教師のそれと違い生徒の内面に素直に入っていく。(同様の言葉でも、教師のそれは、子どもたちにとっては無意識に自分が「評価されている」言葉と受け取られることが時にあるようだ) 従って、多くの場面で(継続的に)、また、多くの地域の方々から声をかけていただけることは、生徒の自尊感情の醸成につながっていくであろう。

二点目は「地域の教育力が育つ」ことである。以前、(ご自身の) お子さんがおられないご夫婦が地域講師として学校にお見えになっていたとき、「私たちには子どもがいないので、最初、生徒とどう接したらいいのか分からなく不安だったが、一緒に学んでいく中で、どういう問いかけをしたら反応がいいかとか、どういう話題なら生徒とコミュニケーションがとれるかが分かってきた」とおっしゃっていた。このご夫婦は、校外で生徒と出会ったときもきっと彼らに声をかけてくださるだろうし、こういった輪が広がっていけば、確実に地域の教育力は育っていくであろう。

さて、以下が一中学校、四小学校の実践例である。

三 各校の実践

1 コロナ禍でも大切な学びや行事はおこないたい A中学校(2年生中心)

① 2学年の活動から

(1) 職場体験学習

一般に2学年でおこなう職場体験学習は、ほとんどの中学校で本年度は中止となったのではなかろうか。本校もいったんは中止となったが、2学年職員は「職場体験学習は、自分に今足りないもの(力)が具体的に分かり、その力をつけるために、自分は中学生時代に何をすべきなのか、また、将来に向けてどう行動していけばいいのかをメタ認知できる格好の機会であるだけに、ぜひ実施したい」と考えた。とはいえ、相手(体験先)があって初めて成り立つ学習である。そこで、まずは、保護者の職場に生徒受け入れの要請をおこない、その後、足りない人数分を、例年お願いしている職場に依頼していった。その際、新型コロナに対して配慮する面、学校の願いを三回に渡り丁寧に説明申し上げた。そしてその結果、10月28、29日(水、木)に全員を二日間の体験に向かわせることができた。(計21職場)

限られた時間の中での事前学習だったので、特別な学習ができたわけではないが、

- ・エゴグラムの実施
 - ・働くことの意義の確認<「収入を得るため?!」、「社会貢献のため?!」、「自分自身の成長のため?!」、「好きなことをやるため?!」、「高い地位を得るため?!」、「理想のライフスタイルを実現するため?!」、「人生を安定させるため?!」、「その他?!」>
 - ・進路講話
 - ・専門講師によるマナー実習
 - ・体験先調べ
- 等をおこない、当日を迎えた。

以下は、体験学習後の振り返りのコメントから。

<体験前に思っていたほどうまくいかなかったこと>

- ・仕事は、気力さえあればできると思っていたが、実際には体力や力そのものが必要だった。(書店)
- ・溶接は、ただくっつけていけばいいと考えていたが、工夫しながら、なおかつ気をつけなければいけないところもたくさんあり、全然うまくできなかった。(金属工場)
- ・長時間、ずっと立っているとは思わなかった。(食料品店)
- ・自分から「あれをやります」、「これをやります」の言葉が、結局一回も言えなかった。(文房具店)

<働く方たちの姿から学んだ(これからの生活に生かしたい)こと>

- ・お昼の時間が終わると、職場の皆さんはすぐ仕事場に戻り、切り替えがとても早かったし、事務所や工場内はきれいに掃除してあった。(金属工場)
- ・たいへんな仕事でも、そのことを顔に出さず、いい顔で仕事をしていた。(食品製造)
- ・働くことはたいへんだが、やりがいがあることの素晴らしさが伝わってきた。(農園)
- ・少しでも分からないことがあると、必ず電話で確認をとっていた。(電器製造)
- ・学校でよく「あいさつ」というが、そんなに大事?と正直思っていたが、外回りに同行させてくださって、その大切さがとてもよく分かった。(楽器店)

(2) 学年アイリスセミナー

A中学校には「アイリスセミナー」という、いわゆる地域の達人に学ぶ授業がある。学年や学級の枠を取り払い、異学年が同時に学べるよい機会でもあるのだが、IIに書かれていた理由で本年度は中止となった。2学年では、コロナ禍や、臨時休校後の慣れない7時間授業等で負担がかかっている生徒たちの心に潤いをもたせるべく、多少、息抜きの学習時間ももたせたいと考え、学

年職員がそれぞれの得意分野で講座を開く、学年アイリスセミナーを8時間実施した。(5講座を開設) 右は、地域の広報に掲載された同セミナー各講座の活動の様子である。



② 1, 3学年の、旅行・集団宿泊的行事の実際

例年、1学年は7月末に一泊の八ヶ岳登山(白駒池周辺)、3学年は4月当初に奈良・京都で二泊の宿泊的行事をおこなっていた。(2学年の宿泊的行事はない)

本年度はどちらも中止となってしまったわけであるが、1学年職員には、「中学生になってから初めてとなる、学年みんなで協力したり楽しんだりする経験をさせたい」、「集団行動の訓練する場をもちたい」という願いがあった。また、通学区域内に適切なキャンプ場があったこともあり、9月1日(火)に同キャンプ場で、日帰りの野外学習をおこなった。

3学年職員には、「中学校3年間の最大行事といえる修学旅行を、泊を伴って実現させたい」、「昨年度から修学旅行に向けて積み上げてきたことを少しでも実践できる場をもちたい」という願いがあった。新型コロナの感染状況が日々変化する中で、旅行方面の決定等に紆余曲折もあったが、最終的に昼神温泉を宿泊地とした飯田、諏訪方面を巡る一泊の修学旅行を9月1, 2日(火, 水)に実施するに至った。

2 地域のよさを知り、故郷を誇りに思う心を育てたい S①小学校（4年）

「地域のよさを実感し、自ら関わろうとする総合的な学習の時間のあり方」のテーマの元、本校が本年度取り組んだ実践報告

例年、S①小学校は総合的な学習の時間で、各学年次のような地域に根ざした活動を行っている。

3年生・・・狐塚（ホテルの名所）の清掃、ホテルの学習、陣場大地でのジャガイモ作り体験
4年生・・・りんごの収穫体験
5年生・・・地域のボランティアの方の協力を得ながらの「米作り」
6年生・・・キャリア教育の一環で、職場体験学習

今年はコロナの影響で、6年生の職場体験は実施できなかったが、学校だけでなく、地域のよさを知り、ボランティアの方に協力いただきながら、地域を学ぶ機会をとってきた。

4年生はこれまでのりんごの収穫体験を変更して、学校の近くにあるマリコワイナリーと交流学習を行った。自分の住んでいる地域のよさを知り、故郷を誇りに思い大切にしていこうとする心情を養うことがねらいである。

本校の総合的な学習の時間の年間計画にある「身近な人々の仕事を知り、それが自分たちの生活や地域の生活を支えていることに気づく」こと、そして、「身近で働く人々の喜びや苦勞を知り、働くことの大切さに気づく」ことも大切にしたい学習である。

主な学習の足跡

学習してきたこと、子どもたちの学び

7月29日（水）・・・「マリコのしずく」（DVD）鑑賞

マリコワイナリーでのワインづくりとワイナリーづくりの過程を
全員で視聴



S①の自然環境の美しさ、豊かさに気づいた。

10月5日（月）・・・社会見学でマリコワイナリーを見学

ぶどう畑とぶどうの選別作業を見学



心をこめて、一生懸命すばらしいワイン作りをしていることに気づいた。



10月 8日（木）・・・楠本先生環境保全授業（3・4校時）

マリコヴィンヤードには豊かな生態系が残っていて、素晴らしい環境であることを学んだ。

子どもたちの感想から・・・

- ・丸子にはこんなにすばらしい場所があったんだと思いました。楠本先生が言ったように、わたしたちの宝物だと思いました。丸子はわたしのじまんの場所になりました。
- ・生物多様性という言葉は初めて知りました。しかも、草原にはきちょうな生物や、ぜつめつきぐ種がたくさんいたのに、今では少なくなっているということも初めて知りました。
- ・楠本先生の話聞いて、植物はいろいろ工夫をして、食べられないようにしていることが分かりました。草原がへって、昔は国土に30%あったのが、1%になって、ぜつめつした動物もいることが分かりました。
- ・私は大人になったら、いろいろな生物と仲良くなったり、きちょうな生物をふやしていく人にもなったりしてみたいと思います。
- ・今地球がどのように変化してきているかを教えてくれて、とても勉強になりました。いろいろな植物の知恵も分かっておもしろかったです。ぼくも、昆虫がすきだから、地球上の自然を守り続けたいと思いました。
- ・今、きき的な草原がマリコヴィンヤードにあることを知りました。
- ・マリコワイナリーの自然は、あたらめてすごいと思いました。マリコワイナリーの自然をぼくも調べてみたくなりました。「命のにぎわい」がもっとふえるといいなと思いました。



考 察

自分たちの地域にあるマリコワイナリーの学習を通し、自分たちの地域の素晴らしさに気づいた子どもたち。さまざまな方との関わりの中で、初めて知ったことや、驚きをもった子どもたち。

新たに、自分で調べたいという意欲がもてたこと、そして、何より自分たちの自慢できるマリコワイナリーをさらに知りたい、貴重な自然や環境を守っていききたいという気持ちも高められた。



今後も、自分たちにできる学習を模索し、「地域のよさを実感し、自ら関わろうとする子どもたち」を育てていきたい。


3 活動を通して対象と出会い直したい S②小学校（3年）

単元名「おいしい きよほうを作ろう」

〈単元設定の理由〉

- ・2年生の頃、地域探検をしていてN地区に巨峰畑がたくさんあることを知っている。
- ・家族の中で巨峰作りをしている家もあり、巨峰について興味をもっている子どもが多い。
- ・巨峰には馴染みがあるが、なぜ巨峰が作られるようになったかや農家の人たちの工夫など詳しいことは知らないため、活動を通して、対象と出会い直す場面が期待できると考えたため。

3年6月	<p>社会の「わたしたちのまち みんなのまち」で、N地区には、巨峰畑がたくさんあり、天皇皇后両陛下も見学にいらしていることを知った。N地区の誇りでもある巨峰はどのように作られているのか調べるようになった。</p>
3年6月 巨峰について調べる	<p>巨峰作りを体験することに決め、資料集を見ながら、巨峰作りの年間計画を調べたり、どのような作業をするかを調べたりした。「房きりってなんだろう?」「なんで、巨峰を切ってしまうのだろう?」「なんで中屋敷にたくさん巨峰畑があるんだろう?」</p>
6月 農家さんとJAの方との出会い 房きり	<p>巨峰作りについて、JAの方にお聴きした。 N地区は、坂になっていて水はけがいいことや天気のいい日が多いこと、朝と夜の気温差が激しいことが、巨峰作りに適していることが分かった。 巨峰には、甘くなるための大きさがあることを知り、はさみで長さを整えた。「うでが痛くなるね」「この作業を一日中やるのって大変だね。」</p> 
7月 袋かけ	<p>虫や鳥から巨峰を守るため、袋かけをした。 病気を防ぐために定期的に農薬を撒いていることを知った。</p> 

<p>巨峰について調べる</p>	<p>2回体験をしてみて、気になったことについて本や百科事典で調べたり、JAの方に質問したりした。</p> <p>「育て方について」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜN地区には、ブドウ畑が集中してあるのか。 ・なぜ種なしのブドウができるのか。逆になぜ種ができるのか。 ・作り方についての疑問 (木の回りになぜわらを置くのかなど) <p>「巨峰について」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どれだけあまいのか。・そうして紫なのか。 ・なぜ巨峰という名前なのか。 ・どんな病気になるのか。 <p>「農家さんについて」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな気持ちで毎日育てているのか。 ・どうやって畑を購入するのか。 ・どうして甘い巨峰を作るのか。 ・できた巨峰はどうするのか。
<p>9月 巨峰の収穫</p>	<p>粒が大きく成長していて、手持つととても重く感じられた。農家さんが作った巨峰やしなのパープル、シャインマスカット、デラウェアを試食させてもらった。</p> <p>食べる人においしいと言ってもらえることが一番うれしいという農家さんの気持ちを知ることができた。また、農家さんは、おじいさんの桑畑を巨峰畑にしたということを知った。巨峰でもくるみでもない桑畑ってなんだろう？という疑問が出てきた。</p> 
<p>9月下旬選果場見学</p> <p>—総合7—</p>	<p>たくさん収穫した巨峰は、この後どうなるかを知るため、選果場に行った。東御市から東京の市場に運ばれることを知ったり、とれた巨峰は形などから点数がつけられるということを知った。また、以前よりは巨峰の出荷量は減ったが、その分シャ</p>

	インマスカットなどの新しい種類のブドウを開発しているという工夫も知ることができた。
なぜ、巨峰なのか。 桑畑からなぜ巨峰畑に変えたのか。	農家さんが言っていた桑畑について興味を持っている子ども達が多くでてきた。10月に社会見学で行ったお菓子処花岡でも、昔は絹糸の繭を売りに来る人でお店が賑わったと聞きさらに興味を持っている。今後、N地区の昔の様子なども調べながら、巨峰を作るN地区の農家さん達についてももう一度追ってみたい。

〈成果と課題〉

- ・社会や理科、国語で学んだことを生かしながら、学習することができた。
- ・巨峰を通して、N地区や農家の方の工夫について知ることができた。また、Nの地形を生かして育てる物を変えてきたということにも気づくことができた。
- ・活動が単発にだったため、巨峰への思いを継続して保持することが難しかった。

4 自分たちにできることを行動にうつしたい M小学校（4年）

「服のチカラを世界の難民の人達に届けよう～ユニクロ・GU 服のチカラプロジェクト～」

① テーマ設定の理由

休校あけの6月、4年生は道徳で「世界の小学生」について学んだ。教科書には、モンゴルやブラジルの子どもたちが、自分たちと同じように学校に通う様子が書かれていた。同時期に、国語では『一つの花』を学習していて、単元の最後に「戦争と平和」について考えた。そのときに、世界ではいまでも『一つの花』の登場人物ゆみ子のように、戦争で悲しい思いをしている子どもがいるのではないかと子どもたちが国際問題に目をむけた。そして子どもたちは、世界には「ただいま」と帰る家や「おかえり」と言ってくれる家族がいない子ども（難民）が多くいることを知った。7080万人もの難民が生きていられるぎりぎりの生活をしている。食べ物や水、服、靴、薬などがなくて生活に困っているということも知り、自分たちにできることはないか考え始めた。すると、ユニクロに難民に寄付をする服を集めている箱があると教えてくれた子どもがいた。更に、調べてみるとユニクロは学校を対象に「届けよう 服のチカラプロジェクト」を行っていることがわかり、このプロジェクトへの参加が決まった。

② 活動の経過

7月 「届けよう 服のチカラプロジェクト」に関するユニクロ出前授業

ユニクロ上田店の社員の方が学校に来て、SDGsやこのプロジェクトの取り組み方、服にはどんなチカラがあるのかななどを教えてくれた。



子ども達より

- ・難民がボロボロの服を着てにげているのが心に残った。服をたくさん届けたいし、自分が着ている服を大切にしたい。
- ・ユニクロやGUが服を売るだけでなく世界を平和にするため、難民のためにがんばっていることを知ってすごいと思った。
- ・普段、あたりまえに自分たちが着ている服に、けがを防ぐ・ばいきんから体を守る・気持ちを表すなどいろいろな服のチカラがあることを知ってびっくりした。

8月 服を集めるときの目標決め

子ども達より

- ・服をもらう難民の気持ちを考えて協力してほしい。
- ・新品ではなく着なくなった服を集めたい。 ・難民が着なくなる服をできるだけたくさん集めたい。

たくさんの人に協力をよびかけると、より多くの人に難民のことや服のチカラのことを知ってもらえるから。いろいろなサイズやデザインの服が集まりそうだから。という理由から全校に協力してもらうことになった。

9月 服を集める準備

グループにわかれて服を集める準備をすることが決まった。子どもたちがどんなグループが必要か考え、当番・お便り・放送・ポスター・掲示・箱とプレゼントの6つで活動することになった。

10月

11月の服集めにむけて、グループごと準備を行った。掲示グループはUNHCRから難民に関する写真パネルを借り、多くの子どもたちが通る通路に掲示した。また、放送グループは、服集めの期間中にその日までに集まった服の数を全校へ知らせる放送をしていた。そのために、休み時間に服を数えるなど自分から行動している姿もあった。

11月

2週間、服を集める活動を行った結果、1780着（段ボール15箱分）の服が集まった。難民に寄付できる服とそうでない服があるので、もう一度点検して箱に詰め、発送した。グループ活動が終わったので、各グループでふりかえりをした。その後、寄贈服との思い出や服の持つチカラについてメッセージを書いた。



子どもたちが書いたメッセージ（ユニクロへの報告文）

- ・このプロジェクトは、私たちは服を捨てなくてすむし、難民の人たちは服をもらえます。だから、笑顔のたくさんあふれるプロジェクトだなと思いました。
- ・ぼくたちはあたりまえのように家や食べ物をもっています。だけど、難民にはそのあたりまえがありません。ぼくたちは少しでも難民の役に立ちたいので、今回服を届けます。
- ・服は温度調節のためだけにあるのかと思っていましたが、服は人を助けたり人を幸せにしたりする力があるのですごいなと思いました。着ない服があったらまた寄付したいです。
- ・最初、このプロジェクトに参加して大変だと思いましたが、難民に服を届けるということになりだんだんわくわくしてきました。ユニクロは、難民を少しでも元気にしようとしていてすごいと思いました。
- ・わたしはただ箱にいらぬ服を入れるだけでいいと思っていましたが、どんな服を集めるかしっかりルールがあって難民のためを思っているんだと思いました。私たちが集めた服が少しでも難民のチカラになるといいなと思います。

③ 実践をふりかえって

総合的な学習では、一つの教科の枠に収まらない課題に取り組む横断的・総合的な学習が目標となっている。今回取り組んだ「服のチカラプロジェクト」は、国際理解や国語の戦争教材、社会科ごみのしよりと利用など様々な教科学習と関連づけられる内容だった。そのため、総合的な学習に適するテーマだったのではないかと思う。また、探究的な学習の側面では、課題を設定するまでの場面が大切なので、テーマ設定までに多方面からアプローチをした。しかし、問題解決的な活動が思うようにできなかったこともあり難しさを感じた。更に、子どもたちにとって難民問題があまり身近な問題ではないので、自分事になりづらいという課題もあった。それによりグループ活動の場面で、主体的、協同的な姿が少ない子どももいた。グループ活動を円滑に進め、目標を達成するために工夫したり、SDGsに関する新聞記事を切り抜いて持ってきたりした子どももいたので、そういう輪が広がるような教師の支援を考えていきたい。グローバル化が進んでいるいま、世界に目をむけ行動したことが、少しでも自分の生き方を考えることにつながっているといいなと願っている。

5 繭への思いを深めたい K小学校（6年）

単元名「繭細工を贈ろう」

（1）テーマ設定の理由

今年度は休校明けすぐから、蚕を育て始めることになった。最初の目的は、自分たちが卒業式に繭で作ったコサージュを作ることだった。1ヶ月間、蚕のフンを掃除したり、桑を探したり、土日祝日は家に持ち帰って世話をしたり、児童が蚕に心を寄せられるよう取り組んできた。虫が苦手なA児もなんとか育てることができた。しかし、育て終わったあとのA児のふり返りを見てみると「やっぱり、育てることはめんどろだった」という言葉が残っていた。このA児にとって、蚕を育てた1ヶ月が「めんどろな」1ヶ月で終わってしまっただけではいけないと感じていた。

そこで、自分たちの育てた繭を使って、コロナで大変な思いをしている人に繭細工を贈ろうという単元を組み合わせることで、繭に対しての思いを別の角度から深めたいと思ったため、このようなテーマを設定した。

（2）活動の経過

①蚕から繭へ

6月に上田蚕種さんから卵をもらい、毛蚕の状態から育て始めた。観察記録を付けたり、お世話をしたりすることを通して、蚕に対する思いを深められるように考えた。多くの児童が可愛がって育てている中、（1）で述べたA児のように「世話がめんどろ」「やだな」といった気持ちのまま育てている児童もいた。7月上旬にはほとんどの蚕が繭になった。

↓丁寧にお世話をする児童



②繭の中の蛹の処理

「マユちゃんと1か月過ごしてみてもどろいたのは、成長です。1か月前は黒くて小さかったのに1か月经つと白くて大きくなりました。最初はマユちゃんなんか飼いたくないと思っていたけど、飼っていくうちに慣れてきました。マユちゃんも同じ命があると実感した1か月でした。」これはある児童のふり返りである。自分たちがコサージュを作るために、その命をもらうということを実感している様子がかがえる。さらに、繭の中の蛹の処理を自らの手で行い、埋めるところまで行うことで、蚕に対しての気持ちを深めさせたいと考えた。しかしA児の気持ちに大きな変化は見られなかった。

↓蛹を埋めて手を合わせる児童



③繭細工を使ってコロナで困っている人を元気づける

医療関係、飲食店、旅館などに電話インタビューを行い、困り感を直接聞く中で、「自分たちの繭を使って勇気付けたい」という思いが強くなっていった。また、自分たちが進めようとしている活動に似ている「シトラスリボン運動」についてお話を聞いた。次は、A児のその後のふり返りである。**「本当の敵はコロナなのに、コロナに困らされている人達にヘイトを向けてしまう人達がいることにおどろいた。自分がそうならないようにがんばろうと思った。」**蚕を育てている時のA児とは違い、問題に向き合い、自分事として捉えている姿が見られる。

（3）成果と課題

今回考えた地域の良さは、「蚕（繭）」そして「地域の人」である。ここで取り上げたA児は、「蚕（繭）」の良さを捉えるのは難しいが、「地域の人」に心を寄せようとしている姿がみられた。そこで、「地域の人」に自分たちが育てた「蚕（繭）」を贈ることで、「蚕（繭）」の良さを捉えなおすきっかけを作れた。

四 令和2年度「総合的な学習の時間」委員

岩本英美里（丸子中央小） 大月美怜（滋野小） 嘉生直樹（神科小）
清澤利哉（塩川小） 宮澤紀夫（青木中）